

ヨナの祈り。不従順な者を赦し、立ち上がらせてくださる神をほめたたえよう。

〈ヨナの救出〉

海に投げ込まれたヨナは、死んだと思いきや、何と主なる神の導きにおいて奇跡的に救出されます。その救出方法は、常識では考えられない救出方法でありました。主なる神は巨大な魚にヨナを呑みこませることに於いて救出されるのでありました。この巨大な魚が、クジラであるかどうかは分かりません。大切なことは、この魚がどのような魚であるかではなく、巨大な魚を通して主なる神がヨナを守り導いているということを押さえなければなりません。そして、死の世界というべき海底に深く沈んでいくところを、ヨナは、巨大な魚の腹の中に守られ、祈りに導かれていくのであります。

〈ヨナの祈り〉

ヨナは、三日三晩魚の腹の中に奇跡的に生存していました。この魚の腹の中は、ヨナにしてみれば暗闇でしたが、祈りの時、神へと心を集中できる空間、時間でありました。陰府とは、死者の行く世界（ヨブ3:17-19を参照）であり、そこでは礼拝も祈りもささげられることがなく、神との関係が一切断たれる（詩編88:4-13, 115:17を参照）ところでありました。その中から、主なる神が奇跡的にヨナを助けてくださり、ヨナを滅びの穴から引き上げてくださったと、ヨナは感謝の祈り（2-10）をささげます。

「わたしは思った。あなたの御前から追放されたのだと……」（5）。このようにヨナは、自分が海に投げ込まれて、もはや生きるはずはないと

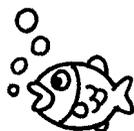
思っていたことが分かります。けれども、ヨナは、主の力において死から生へと導かれたのであります。そのことをヨナは、知ったのであります。ここでは、主への感謝が述べられていると同時に、罪の自覚を表明しています。罪の自覚と主の赦しの感謝において、ヨナは「わたしは誓ったことを果たそう」という決意をしています。つまり、ヨナは、「立ち上がらせてくださる神の働き」を知ったのであります。

私たちの信じている主なる神は、不従順な者を赦し、その不従順な者を立ち上がらせてくださる神です。それが主の救いです。主の救いは、抽象的なものではなく、不従順な者にもなすべきことを気づかせてくださるといった具体的な、神の働きがあるのです。その中で、ヨナは「救いは、主にこそある」（10）と信仰告白したのであります。

私たちも、罪人ゆえに不従順な者ではありますが、主が具体的なことを通して立ち上がらせてくださるのです。私たちの信じる神は、この私を立ち上がらせてくださる神であることをほめたたえるものでありたいと思います。

さて、こうして話は振り出しに戻ります。振り出しに戻るというより、主なる神が導きだした結果であり、神が決めた通りであった。ヨナは、自ら死に値することを自覚していて、しかも死からの救出を主に願って聞き入れられたのです。

救いにふさわしくない者をも救い出す神の憐れみを体験したヨナは、もし主がニネベの町に対して同じ憐れみを示すならば、それを理解できたはずであります。しかし現実にはどうであったでしょうか。3章では、ヨナは神からの使命を果たし、4章では不平を洩らすことになるのであります。（潮田 祐）



テキスト ヨナ書 2章
参照カテキズム 子どもカテキズム 問21

〔単元のねらい〕

ヨナ書2章は、神のみ手によって死の淵から救い出されたヨナがうたった、実に美しい讃美の歌である。イエス・キリストの救いに招かれた者たちは、皆ひとしくこの歌を歌うことができるであろう。旧約聖書の中でもその深みと豊かさにおいて比類がないと評されるこの祈りを、わたしたちも心深く味わいたい。そして、ともに声を合わせて神をほめたたえたい。

「救いは、主にこそある」

ニネベに行くようにとの神さまのご命令に背いてタルシシュ行き船に乗り込んだヨナは、船が砕け散るかと思われるような大きな嵐にいました。船の乗組員たちは、この大きなわざわいの原因がヨナにあることがわかると、ヨナを海に投げ込みました。

ヨナはこのとき、自分の命はこれで終わってしまうと思ったでしょう。潮の流れに巻き込まれ、高波が次々と頭の上を越えていきます。大水が喉元にまで達して、海藻が頭に絡みつきます。深い、果てしない海の真ん中で死んでいかなければならない。どんなに恐ろしかったことでしょう。

そして、ヨナは神さまが自分を海に投げ込まれたことを知っているのです。神さまのみ言葉に背き、み前から逃げ出した罪の刑罰として、今自分は息絶えようとしているのだということを知っているのです。

けれども、この大きな恐れの中で、ヨナは神さまのみ名を呼びます。神さま、どうかわたしの命を救ってくださいと祈り願います。すると、神さまは彼の祈りを聞いてくださったのです。神さまは大きな魚にお命じになって、ヨナを呑み込ませます。ヨナの命を助けるためです。ヨナの乗った船を嵐にあわせたのは神さまです。しかし、ここでヨナの命を救うために大きな魚を備えてくださったのも神さまです。

ヨナは自分を呑みこんだ魚のお腹の中で、神さ

まをほめたたえます。今朝の2章は、このときにヨナが魚のお腹の中でうたった感謝と讃美の歌です。

ヨナはこの時の経験によって、神さまがほんとうに神さまのみ名を呼び求める者を救ってくださるお方であることを知ったのです。死に直面するような危機の中で、神さまはみ名を呼ぶ者を助けてくださる。喉元まで襲っている大水から助け出してください。その救いの恵みを身をもって味わい知ったのです。

ヨナは三日三晩魚のお腹の中にいて、それから陸地に吐き出されました。神さまは彼の命を守られたのです。でも、考えてみると今ここで讃美の歌をうたっているヨナは、まだ魚のお腹の中にいます。そこは真っ暗闇であったと思います。荒れ狂う海も恐ろしい場所ですが、この真っ暗闇の場所も恐ろしかったのではないのでしょうか。

しかし、ヨナはこの場所で救いの喜びに満たされています。神さまの恵みを知った人は、真っ暗闇の中でも喜ぶことができます。

わたしたちの日々にも時につらいこと、悲しいこと、恐ろしいことが起こります。大きな恐れや不安に押しつぶされそうになることがあるかもしれません。

けれども、わたしたちは神さまのみ名を呼ぶことができます。神さまに助けを求めることをゆるされています。そして、神さまはみ名を呼び求める者を必ず助けてくださいます。真っ暗闇と思え

るような状況の中でも、そこに必ずみ手を伸ばしてくださいませ。苦しみから逃れる道を備えてくださいませ。暗闇の中に光がさし込みます。それゆえに、わたしたちは暗闇の中でも讃美の歌をうたうことができるのです。

わたしたちの命を支配しているのはわたしたち自身ではなく、造り主なる神さまです。神さまはわたしたちを憐れみ、わたしたちを救し、わたしたちに最善をなして下さるお方です。それゆえわたしたちは安心して、この命を神さまのみ手にゆだねることができるのです。

イエスさまはご自分が十字架にかかれることを、神さまがヨナを救って下さったことになぞらえてお語りになりました（マタイによる福音書12章3節）。ヨナは三日三晩魚のお腹の真っ暗闇に置かれ、死の中で命を得ました。そのことはイエスさまがわたしたちの罪の身代わりに十字架に

死なれたこと、十字架の恐れと苦しみをその身に負われ、陰府の底にまでくだっていかれ、そして三日目に死をうち破ってよみがえられたこと、この十字架と復活のみわざによってわたしたちを死から命に移しかえて下さったこと、この先取りであつたのです。

イエスさまが死んでよみがえって下さったゆえに、わたしたちは罪の苦しみ、死の恐れからときはなれています。わたしたちが深い闇の中に置かれている時にも、イエスさまはわたしたちとともにいてくださいます。大きな苦しみやわざわざいの中でみ名を呼び求める時、イエスさまは必ず答えて、助けてくださいます。

神さまに命を守られたヨナは「救いは、主にこそある」（10節）とうたいました。イエスさまの十字架とよみがえりによって、わたしたちは「救いは、主にこそある」ことを鮮やかに知ることをゆるされています。（木下裕也）

[今週の暗唱聖句] ヨナ書 2章10節後半

救いは、主にこそある。



〈ねらい〉

神様は、ぼくたち私たちを心から愛しておられます。そして、ぼくたち私たちがどんなに失敗をしたとしても、必ずやり直すチャンスを与えてくださいます。その神様の愛について、御言葉に聞きましょう。

〈展開例〉

さて、海の中に投げ込まれてしまったヨナさんでした。本当ならば、このまま溺れ死んでもおかしくはなかったのに、神様は実に不思議な方法でヨナさんを助けてくださったのです。それは、魚にヨナさんをのみ込ませるといことでした。

「主は巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられた。ヨナは三日三晩魚の腹の中にいた。」(1)

この魚は何だろう？ 皆どう思う？ 人間をのみ込むことができるのだから、クジラかな？ よく分からないけれども、神様は、大きな魚を送って、ヨナさんをのみ込ませたのです。そして、胃袋の中で消化させないで、実に不思議な方法で、三日間、守られたのです。

不思議です。神様の御手の中で、この三日間が神様の御前での祈りの時となりました。

「ヨナは魚の腹の中から自分の神、主に祈りをささげて、言った。苦難の中で、わたしが叫ぶと／主は答えてくださった。陰府の底から、助けを求めると／わたしの声を聞いてくださった。」(2-3)

ヨナさんは、自分が海に投げ込まれたときに、きっともう駄目だと思ったでしょう。実際に、「わたしは思った／あなたの御前から追放されたのだ

と。生きて再び聖なる神殿を見ることがあろうかと。大水がわたしを襲って喉に達する。深淵に呑み込まれ、水草が頭に絡みつく」(5-6)と祈っているのです。そして、命が守られたときには、「わたしは山々の基まで、地の底まで沈み／地はわたしの上に永久に扉を閉ざす。しかし、わが神、主よ／あなたは命を／滅びの穴から引き上げてくださった。息絶えようとするとき／わたしは主の御名を唱えた。わたしの祈りがあなたに届き／聖なる神殿に達した。偽りの神々に従う者たちが／忠節を捨て去ろうとも、わたしは感謝の声をあげ／いけにえをささげて、誓ったことを果たそう。救いは、主にこそある」(7-10)と祈りました。

ヨナさんは、本当に神様にあって、わたしの命は守られた、神様にあって、わたしの命は生かされているのだ、その確信に立つことができるようになったのです。そして、こう祈ると、神様はヨナさんを陸地に吐き出しました。(11)

ぼくたち私たちも、失敗してしまうことがたくさんあります。ああすれば良かったと思うこともたくさんあります。でも神様は、ぼくたち私たちがどんなに失敗をしても、やり直すチャンスを与えてくださるのです。ヨナさんのように、失敗をしても、悔い改めて、もう一回立ちあがっていきましょう！！

〈お祈り〉

天の父なる神様。私たちは失敗することがありますが、あなたは、もう一回やりなおすチャンスを与えてくださいます。感謝します。主イエス・キリスト御名によってお祈りします。アーメン。



〈ねらい〉

ヨナの祈り。不従順な者を救し、立ち上がらせてくださる神をほめたたえよう。

〈展開例〉

ニネベに行くはずだったヨナさんは、神様のご命令に背いて、ぜんぜん方向が違うタルシシュ行きの船に乗り込んでしまいました。そして、その船は大嵐にまきこまれてしまいました。原因がヨナさんにあることを知った船の人たちは、ヨナさんの手足を縛って、ヨナさんを嵐の海へほうり投げました。ヨナさんは嵐の海に投げ出されました。

絶体絶命です。死ぬと思ったでしょう。

けれども、ヨナさんは、神様の命令に背いた刑罰として海に投げ出されたことを知っていました。その時、心から「神様、助けてください」と、「私を救ってください」と、ヨナさんは祈ったのです。

神様は大きなお魚にヨナさんを飲み込ませました。神様はヨナさんを救ってくださったのです。

ヨナさんは神様のご命令に背いたことを反省し

ました。そして、心から感謝しました。

お魚のお腹の中は、真っ暗だったでしょうね。恐いでしょうね。でも、ヨナさんは祈りを聞いて助けてくださった神様に感謝の気持ちでいっぱい讃美の歌をうたっていました。

真っ暗の中でも、神様のお恵みで救われた人、お恵みを受けた人は喜ぶことができます。

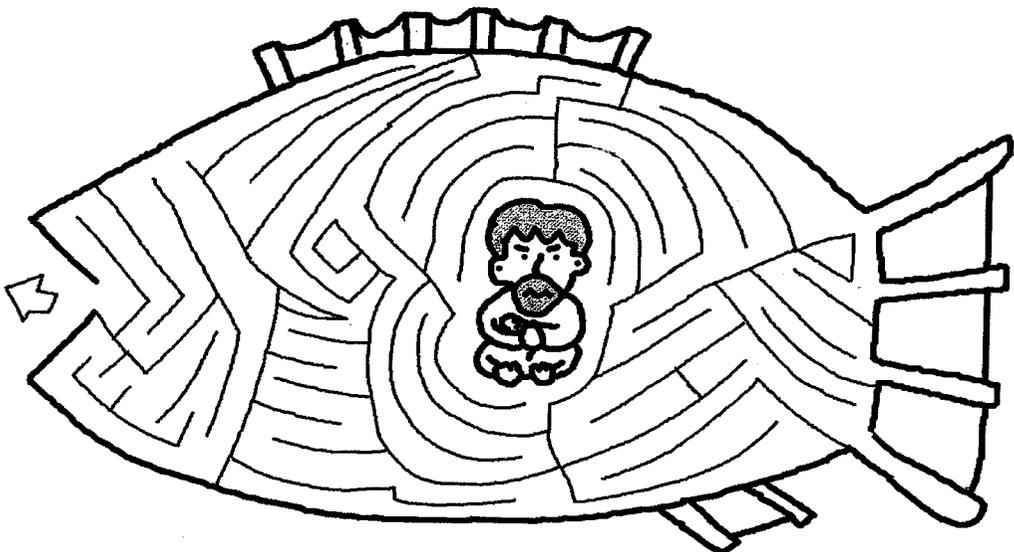
私たちにもつらいときや泣きたくなるときがありますね。そんなとき、神様はみなさんが「助けてください」「守ってください」とお祈りすることを待っておられます。神様は、ヨナさんのように、必ず私たちを助けてくださいます。真っ暗な中から救い出してくださいます。ヨナさんを助けてくださった神様は、今も私たちの祈りを聞いて、助けてくださるのです。感謝しましょう。

〈お祈り〉

神様。ヨナさんの時代も、今の時代も、私たちが救い出してくださいる神様。一生懸命にお祈りします。この一週間も私たちと一緒に歩いて守ってください。アーメン。

〈やってみよう〉

○ヨナを外に出しましょう。



〈ねらい〉

ヨナの祈りから、神様の用意してくださる救いに感謝することを学ぶ。

〈今日の聖書〉**★ヨナ書2章**

①聖書を読みましょう。

②物語を整理しましょう。

神様は海に投げ込まれたヨナに何を用意されましたか？

ヨナはどうなりましたか？

どのくらいの間、そうしていましたか？

魚はどうしてヨナを吐き出したのですか？

〈展開例〉

先週から、ヨナさんのお話を聞いています。今日は、前回の続き。

海に投げ込まれたヨナさんは、絶体絶命でしたね。手足を捕らわれて海に投げ込まれたら、死ぬしかないと思うでしょう。とても怖かったと思います。そんなヨナさんに、神様は大きな魚を用意してく

ださいました。ヨナさんが死なないように、その魚に命令して、ヨナさんを飲みこんでもらったのです。

そうすることによって、ヨナさんは助かりました。

そこで、ヨナさんが神様にささげたお祈りが、今回のメインです。考えてみると、魚のおなかの中に居るヨナさん、不安な気持ちにもなるのではないのでしょうか。真っ暗な中で、ただひとりぼっちだったら。

だけど、ヨナさんのお祈りに注目しましょう。喜びで満たされています。

私たちは、神様に支配されています。神様は、私たちを憐れみ、たいせつにしてください方です。だから私たちも、何も見えない、わからないときでも、神様に安心して任せることができるのです。

〈祈り〉

神様。いつも私たちを助けてくださってありがとうございます。暗闇の中に居ても、あなたを信頼することができますように。アーメン。



対話の手掛かりとして……。

- ①神さまに祈ることは息をすること、呼吸をすることです。普段私たちが、呼吸をしないと苦しくなり、命の危機を感じます。それと同じように、祈ることは、信仰生活において欠かすことができない大切なものなのです。でも、なかなかお祈りができなかったり、どう祈っていいのか分からないということがあります。前は、御言葉から離れたヨナの姿を見ましたが、私たちは御言葉だけではなく、祈ることにおいても神さまから離れてしまうことがあるのではないのでしょうか。今回はヨナの物語をとおして、「祈り」について考えてみましょう。
- ②ヨナは神の言葉から遠くに離れようとしてました。しかし、その結果どうなったのでしょうか。嵐の海に投げ出されて、死ぬほどの経験をしたのです。でもそこでヨナは何をしたのでしょうか。神さまに対して、何でこんな目に遭わせるのだと、怒りを覚えたのでしょうか。もう神さまなんか知らないと益々背を向けたのでしょうか。そうではありませんでした。「自分の神、主に祈りをささげた」のです(2、8節)。「困ったときの神頼み」という言葉があり、これを否定的に理解する人もいます。確かに自分の都合のいい時だけ、お祈りすることはよくないことでしょう。でも、「困ったときの神離れ」ということも、神さまは悲しまれます。私たちには祈ることができない弱さがありますが、様々な出来事をおして、私たちの心が再び、神さまの方に向き、祈ることへと促されていくのです。
- ③お祈りをしても、神さまは何も聞いてくださらないという経験が誰にでもあると思います。さすがにこんなところにまで、神さまは来てくださらないと諦めてしまうこともあるでしょう。

でも神さまは、苦難や陰府の中にあっても、死を前にしても、ヨナの祈りを聞いてくださり、答えてくださるお方であることが分かります(3、7、8節)。私たちはひとりぼっではありません。どんなところにも神さまはおられます。だから安心して「神さま」と呼ぶことができるのです。

- ④私たちの祈りに対して、神さまが答えてくださるというのは、具体的にどのようなことなのでしょう。今回のテキストの最後11節には、「主が命じられると、魚はヨナを陸地に吐き出した」とあります。次の3章では、ヨナが、神さまから命じられたニネベの地で宣教活動を始めることになるのです。つまり、ヨナが大地に吐き出されたということは、自分がこれから歩むべき道が示されたということです。ヨナは神に悔い改めの祈りをささげ、赦しを確信し、新しく歩むべき地に押し出されていったのです。しかも神さまは私を救ってくださったという感謝を携えて。私たちも祈ることによって、新しく歩む大地へと送り出されます。闇から光の射す方へ、死から命へと導かれています。祈りを聞いてくださる神さまが、私たちを新しい存在へと変えてくださるのです。
- ⑤神さまや信仰について分からないことや疑問に思う子どもたち多いと思います。自分は何も分かっていないから、信仰告白する資格はないと思いつていることも多いのです。だから、お祈りをする資格もないのだと……。しかし、そうではありません。神さまのことが分らなければ、神さまに祈ったらよいのです。「あなたのことを教えてください」「わたしを助けてください」と。その先には、「救いは、主にこそある」(10節)と主をほめたたえながら歩むことができる新しい大地が広がっています。